
IS ~ 紅と蒼を纏いし男 ~

葛綺ナガト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ISと紅と蒼を纏いし男

【Nコード】

N2312BA

【作者名】

葛縞ナガト

【あらすじ】

この小説は、100パーセント作者の趣味and妄想で書かれます。

もし、織斑一夏が存在せず、織斑千冬が一人っ子だったら？

もし、原作ヒロインズのほとんどと接点がない男がISを動かしたら？

もし、その男とISが規格外だったら？

などなど、いろいろと原作をぶち壊してますが、それでもいいという方は読んでください。駄文です。感想とかあったら書いてくれる

とっねじいです。

プロローグ1（前書き）

どうも、葛縞です。がんばっていきたいと思います。

ちなみに「（ 「は心の中で語っていることです。それではどうぞ。

プロローグ1

『インフィニットストラトス』、通称『IS』。

希代の天才『篠ノ之束』により生み出されたマルチフォーマルスー
ツ。本来は宇宙空間での使用を考えられていたが、その圧倒的な戦
闘力により兵器へと利用されてしまったものである。

しかし、さすがにそんなものを使って戦争などできるはずもなく、
さらにISのコアと呼ばれるものが四六七個しかないので『アラス
カ条約』など様々な条約を受けて今では競技として受け入れられて
いる。そんなISだが、重大な問題があり、それは

『女性しか動かせない』

というものだ。これによって世界は女尊男卑へとまっしぐら。男性
たちは肩身の狭い思いをしている。
そんな中で、たった一人の例外が現れた。その一人は、ISを動か
したのである。

桐谷和人、一五歳、私立神崎高等学校一年生。

性格、DS。しかし身内にはとてつもなく寛容。

特技、古武術（無手同士、もしくは剣術に限れば歴代最強）。

趣味、鍛錬（常人ではついていくことは不可能）

読書（主にライトノベル）

音楽鑑賞（人には意外と言われるがクラシック）

これが俺こと桐谷和人のプロフィールといえる。ん？あきらかにチ

ートなスペックがあるだつて？そこはあれだ、俺クオリティーだ。
…っていつかあの爺どもが鬼過ぎんだよ！

なんだよ！健全なる精神は健全なる肉体に宿る、故に幼いころより
鍛え上げるべし！って。

おかげで健全とは程遠いスレた精神（自分でいうのもアレだが）だ
よ！

顔の表情にしたっていつも眉間にしわが寄っちまってかなりきつ
いものになってるんだぜ？

あとだ、このプロフィールには一か所間違がある。それは通って
いる高校の名前だ。

「（…………いくら俺でも、これは…、きつい）」

なぜきついのか？それはクラスの生徒全員に注目されているからだ。

し・か・も、

クラスメイトは全員『女』なのだ。

きつくはないはずがない（は？楽園だだと？ちょっとこっち来い。指
導してやる）。

「（は、なんでこうなった？）」「

それは今からひと月ほど前にさかのぼる。

プロローグ1（後書き）

お次は回想からスタートです。

ブログ2（前書き）

やってきましたブログ2。
どんどん行きましょう。

ブローグ2

ひと月ほど前、俺こと桐谷和人は高校受験に向かっていた。

「ふう。もう少して会場だな」

俺が受ける高校はかなり名門で就職率が高い。

俺は早くひとり立ちしたかったので（ほんととは高校入学などせずにそのまま働きたかったが爺どもがそれを許さなかった）そこにしたので。

「まだ時間もあるし、コンビニでなんか買つか」

俺は近くにあったコンビニに入った。そしてその選択を俺はのちに後悔することになるのだが、

その時の俺はそんなことわかるはずもなく、買い物にいそしんだのであった。

「ありがとございましたー」

コンビニ店員さんのあいさつを聞きながら外に出た俺。時間的にはちよつと急ぐべきだった。

「やべえやべえ。思ったより混んでたしな。…ん？なんかトラックが来るな？」

なんかとてつもない勢いでトラックが交差点を曲がってきた。しかもそれを追うように…。

「なんでISに追われてんだ？」

そう、ISがやってきたのだ。そのISは量産型の『ラファール・リヴァイヴ』だった。

トラックはなんとかそのラファールの攻撃をよけていたが、ついにかすめた。

それによってトラックは横転。そのトラックに積み込まれていたらしいコンテナが俺のほうに勢いよく…って！このままじゃ直撃するし！

「どわあっと。いったいなん…」

「はははあっ！ようやつと捕まえたぜ！」

なんかラファールを装着してるやつが言った（ついでに言う俺は何とかコンテナを回避、ケガなくたっている）。どうやら狙いはこのコンテナらしかった。

コンテナは先ほどの衝撃で一人が入り込めるくらいの歪みができていた。しかも…。

「（あれ？なんでこんな都合よく俺のほうに歪みが向いてるわけ？）

」

そう、なんでかコンテナの歪みは俺に向かって開いているのだ。

……毒食らわば皿まで。こんな状況だ。入ってみるのもいいだろう。っていうわけであっちでトラックの運転手と謎の襲撃者が言い合ってるけど気にせず俺はコンテナに入った。

研究者SIDE

私はとある企業の研究者だ。私はようやく出来上がった試作機のISを本社に運ぶ仕事をしていた。だがどういつわけか極秘のはずの情報が漏れていた。よって私は襲撃を受けたわけだが。

「くっ、貴様は何者だ！」

「はっ、そんなことに答えるわけがねえだろうが！」

ちっ、何か情報を引き出せばよかったのだが。
だが狙いは間違いなくISだろう。アレを渡すわけにはいかない。

「貴様がどこのものかは知らないが、あれだけは渡すわけにはいかん！」

「渡さなくても結構だぜ。なんせ奪ってくからなあ！」

私が拳銃を構えても微動だにしない。
当然だ。ISにはシールドエネルギーが存在する。拳銃程度では脅しにすらならない。

「（くっ、どうすればいい？）」

万事休す、と思っていたその時、突然コンテナの天井が爆ぜた。

「「なっ！」」

これには私も襲撃者も驚いた。
そして気づいた時には襲撃者は吹き飛んでいた。
そのかわり、私の前にいたのは、

紅と蒼の二色に彩られた、

全身装甲のISだった。

ブログ2（後書き）

はい、回想終了です。

サクサク行きたいところですが、あまりサクサク行くとストックが切れてしまうのでほどほどにしたいと思います。

自己紹介。 え？なにこのテンション？（前書き）

第3話目です。

けっこう原作参照とか出てきますが許してほしいです。

あとお気に入り登録してくれた人たち、ありがとうございます。

これからがんばりますのでどうぞご覧下さい。

では、本文スタートです。

自己紹介。え？なにこのテンション？

桐谷和人SIDE

そんなこんなでIS動かしちまって、さらに襲撃者さえも退かせてしまったもんだから（まあ性能差がありすぎたが）さあ大変。

いろんな企業が言い寄ってきたり、マスコミには群がられるわ、そのISを作っていた企業からテストパイロットにならないかと言われたり。

いろいろとウザったいことが多かったわけですよ。んで、とりあえずISのことを学ぶという大義名分を掲げて、この『IS学園』へと入学したのだ。

つ・ま・り、

俺はこのクラスどころか、この学校全体でたった一人の男子学生なのだ。

まさに黒一点。

……つらいんだよおおおおお！！！！
気軽に話しかけられる奴なんて誰もいないし！
みんなは俺のことをがん見してるし！！
俺がいったい何をしたというんだああ！！！！

「……谷君、桐谷君！」

「ふえい！」

あ、やべ。絶望してて呼ばれてることに気付かなかった。

俺を呼んでいたのはこのクラスの副担任『山田真耶』。

試験の際にも会った。が、一つ言わせていただきたい。

……この人絶対俺より年上じゃないですよ？

だって俺より背は低いし、雰囲気は完全に小動物だし。

しかも今まさになんか泣きそうな顔してるんですけど。

「あ、そ、その、ごめんね？今自己紹介で、次は『き』だから桐谷君なんです。

だからその、怒らないでくださいね？」

「いや、怒らないんで。今は単純に考え事してて話聞いてなかっただけですから。

ついでに怒ってるように見えるかもしれませんが、これが俺の素の表情なんで」

「そ、そうなんです。よかったです。それじゃお願いしますね？」

「へーい」

返事をして俺は立ち上がる。そしてクラスメイト全員を眺める。

全員なんらかの顔をしてこちらを見ている。

中にはなんか敵意というか憎悪みたいな視線を感じるがまあいい。

「桐谷和人だ。趣味は鍛錬、特技は…まあ秘密だ。これからよろしく頼む。

あと俺の表情については今山田先生に言った通りこれが素だ。気

にしないでくれると助かる」

しーんとなる。あれ？なんかしくじった？

「「「「き…「「「「」

「き？」

「「「「きゃあああああああ！…！」「「「「」

「（ぐあああああああああああああ！…！）」（鼓膜に甚大な被害が！）」

俺が軽く悶えていると…。

「なんかワイルド系！」

「それにかなりのイケメン！」

「あの目で睨まれたい、罵られたい！」

「桐谷くん、はあはあ」

おいおい、このクラスはどうなってるんだ（ついでに後半の何人かはもう手遅れっぽい）。

俺が戦慄しかけていると。

ずばこーん！

「いつて…って誰だ！」

どばーん！（威力はさつきよりも上）

「つつつつ~~~~」（縮こまって悶えてる）

「さつさと座らんか馬鹿者。そして先生には敬語を使え」

「あつ、織斑先生」

なんか俺にはBGMとして銅鑼の音が聞こえるんだがおかしいのだろうか？

このキリツとした感じの女性は織斑千冬。

知らない人はいないんじゃないだろうかと言える超有名人。

なんせIISを使つた世界大会で優勝しているのだ。

その功績により、『ブリュンヒルデ』とも呼ばれる（本人はどうもそれを嫌がっている節があるが）。ていうか、なんでこんな有名人がいるんだ？

「さて、諸君。わたしがこの一年間このクラスの担任を受け持つ織斑千冬だ。わたしの仕事はまだ何も知らない一五歳の小娘たちを……（めんどいんで省略。詳しく知りたい人は原作参照）」

へえ、この人めつきり表舞台に出なくなったと思ったら教師をしてたのか。

意外だ。

この人だつたらまだ現役でパイロットできるだろうに。

そしてなんつー軍隊まがいな自己紹介。

ここは軍ではありませんよ、織斑教官。

……軍と言えば、あいつどうなってるかな。最近文通だけだし。

二年前と比べてどれくらい変わったんだろうか…？

ていうかあいつの手紙から察するに副隊長のやつのせいでいろいろと間違った方向に日本を理解しつつあるんだよねあ。

「で？なぜこのような騒ぎになった、桐谷」

「普通に自己紹介しただけです」

「ふむ…、まあいい。座れ」

言われたので座る俺。そうして続けられる自己紹介。
その間なぜか織斑先生に見られている俺。
俺、何かした？

……俺、この人苦手かも。

自己紹介。 え？なにこのテンション？（後書き）

はい、ここで切ります。

人物設定やIS設定についてはもうちょっとしてからになると思います。

予定としてはクラス代表決定戦が終わってからでしょうか？

まあ駄文だとは思いますがどうぞご鼻屑に。

ではでは。

侍ガールとの出会いと授業と（前書き）

はい、4話目です。

ここで和人君とISの規格外さがほんの少し露呈します。
ではどうぞ。

侍ガールとの出会いと授業と

S H Rが終わって一限目が始まる前の休み時間。

………一つ訂正。俺にとっては休み時間ではない。

むしろS H Rよりひどい。

なんせ他のクラスからも俺を見に来ているから。

しかも全員なんか牽制し合って話しかけてこようとしないんだよね。
うん、これ、なんてイジメ？

「（話しかけるんだったら話しかけてきてくれ〜）」

そんなことを考えていたらなんか急に騒がしくなった。
ん？なんか一人がこつちに来るんだけど。

「………ちよつといいか？」

その子の第一印象は武士。長い髪をポニーテールにして目はきりつと吊り上り、

その姿勢は全くぶれない。うん、なかなか使い手だ。

「ああ、いいけど。えつと…」

「篠ノ之箒だ。箒でいい」

「あ、そう。んじゃ箒、俺も和人でいい。んで、ここで話すか？」

「ああ、ここでいいだろう」

箒は腕を組んで俺を見て、いや、観ている。

おそらく、趣味が鍛練と聞いてどれほどのものなのか興味がわいたのだろう。

「それでだ、和人。おまえは趣味が鍛練だといったな？ 剣は使えるのか？」

「もちろん。むしろ剣術と無手同士だったら流派の歴史の中で開祖を超えて最強って言われてる」

「ほう、それで流派名はなんというのだ？ 私は篠ノ之流だが」

「俺のほうは『残月流』だ。実践本意の殺人武術さ。

しかも新しく生み出される武器に合わせて進化させるように開祖の『残月則宗』が

伝えてたらしくてな。今じゃ拳銃を使った銃衝術まで確立されてるぜ」

「残月流か。聞いたことはあるが、まさか今でも伝えられているとは」

「ま、それがまっとうな判断さ。今時殺しの業を伝えるのが異端つてもんだ」

俺は肩をすくめてみせる。箒のほうは違いないというような顔をして苦笑している。

「箒、そろそろ授業開始だ。さっさと座らねえと出席簿が火を噴くぜ？」

「確かにあれは痛そうだな。さつさと座るとしよう」

再び苦笑しつつ箒は自分の席に戻っていった。さて、俺も準備しなければ。

アレ、ほんとに痛いんだよなあ。

なんだよ、紙でできてるはずなのに、なんで竹刀より痛いんだよ。

「え〜とですね。ですからISとは……（省略）」

うん、一限目ですが。……結構きつい。

予習はしっかりしてきたけど、それでもやっぱり付け焼刃感がいない。

これはもう少し本腰を入れて勉強せなあかん。

「桐谷君、今までのところでわからないことはありますか？」

「いえ、今のところは何とか。

わかんないところがあれば放課後にでも聞きに行くんで構わずに進行してください」

「はい、わかりました。それじゃわかんないことがあったら遠慮なく来てくださいね？」

そういつて山田先生は授業を再び進める。うん、俺ももっと頑張らないとな。

『（そうよ、和人。あなたはあたしのマスターなんだからちゃんと頑張ってもらわないと）』

『（……レスティア、授業中に話しかけんな。集中してなきゃいけないのもしんどいんだから）』

『（ぶーぶー）』

『（はいはい）』

ん？ いったい誰と話してんだって？

それは俺のISのコア人格、レスティアだ。

なんか俺がISに乗り込んだ瞬間、覚醒したらしくて以来、ひまさえあれば俺に話しかけてくる甘えん坊だ。

正直こいつが覚醒してなければ俺は謎の襲撃者に叩きのめされて下手すりゃ死んでたかもしれないんで、こいつには超感謝。

こいつが覚醒してくれたからこそ、あそこまでISが強化されたっていうのがあるし、

初期化と最適化も一瞬で済んだんだよね。

『（じゃあさ、授業が終わったら話しかけてもいい？）』

『（ああ。それならいいさ。ただし、他の人が話しかけてきてるときはやめてくれよ？）』

わかってるよーと言いながらレスティアはコア空間に戻っていった。

侍ガールとの出会いと授業と（後書き）

はい、第4話でした。

『（ ）』はISのプライベートチャンネルなどと思っててください。

次は少し人物設定を入れようと思っています。
では。

人物設定（前書き）

規格外な主人公のスペックを多少公開します。

人物設定

桐谷和人

顔つきは多少きついもののほんとには心優しい男。

ただし、心優しい分とでもいうのか、敵に対しては容赦しない。

古流武術、『残月流』の使い手。

技量に関しては剣と無手は歴代最強。開祖の『残月則宗』すら超えるのではと師匠で

ある人々から評価されている。

しかし、その修業は苛烈を極め、たとえば木刀で布を切らされたり、気配察知を高めるために山に放り出されたり、

拳句の果てには全方位から弓矢を射られたりなど。

本人は爺共マジで鬼畜と言っている。

しかしそんな修行も彼は今ではいい思い出と思っている。

IS戦闘に関しては素人だが、対人戦に関してはエキスパートであるため、

初めてISを動かしたときでさえすさまじい戦闘力を見せつけた。

専用ISは『暁と黄昏 サンライズ・トワイライト』

レスティア

『暁と黄昏 サンライズ・トワイライト』のコア人格であり、和人の相棒。和人がコンテナに安置されていたISに触れた瞬間に目覚めた。

性格（？）は天真爛漫、退屈を嫌がり、和人に対して甘えまくる。

戦闘では和人をサポートするAIの役割を果たす。

人物設定（後書き）

ISの細かい設定に関してはもう少し後に
では。

は？代表候補生？なにそれ、強えの？（前書き）

第6話です。

まあタイトルで分かるかもしれませんがあの人登場です。

戦闘はまだです。おそらくこれから2、3話先になると思います。
では、どうぞ。

は？代表候補生？なにそれ、強えの？

一限目終了。先生方が去っていくと教室内は一気に騒がしくなる。

友達と話す奴、授業の復習をする真面目な奴。
そして引き続き俺を観察してくる奴。

……ちなみに俺は復習する側だ。
そうしなきゃついていくのがつらい。

レスティアも俺の大変さを理解しているのか話しかけてこない。
うん、やっぱり最高の相棒だ。
しかし、そううまくはいかないのが世の常で。

「ちょっとよろしくて？」

「（うへーい、いつか来ると思ってたが意外と早かったな？）」

俺に声をかけてきたのは明らかに俺を見下した女。
完全に女尊男卑に染まりきった外人だった。
長めの金髪で、それをロール状にしている。
この髪形はおそらくイギリス人だろう。

「よろしくない。いま復習で忙しい。あとにして」

「まあ、なんてつれない態度でしょう！このイギリス代表候補生で
あるわたくし、

セシリア・オルコットが話しかけているというのに！」

……俺さあ、こついうやつを見るとさ、こつ、首の骨をさ、こきつとやりたくなるんだよねえ。やってもいいよな？ え？ だめ？

「いや、代表候補生って言ってもさ、それがどれだけすごいのか、ついひと月ほど前までただの一般人だった俺には分からないんだが？」

ちなみにこれはまるつきり嘘。

さつさと立ち去ってほしいから言ったことである。

「ふん、やはり男とはしょせんその程度ですか」

期待して損しましたわとか言ってるが、そっちが勝手に期待しただけだろうが。そして勝手に損してそれを俺のせいにするな。

「まあいいですわ。わたくしはとても優しいので、ISについてわたくしが教えて差し上げないこともなくってよ？」

これがやさしいってか？ だとしたら世界中の人々は優しいやつばかりだな。

「いらねえよ。最初っから人を見下す奴に教えを乞うほど俺は落ちぶれちゃいない」

「…生意気ですわね、男のくせに」

はいはい。

「んじゃ、もう話はおわりか？俺としてはそろそろ次の予習を始めたいんだが？」

「ふん、また来ますわ。覚えていることね」

覚えちゃいないがな。だが、この会話がフラグになるとは…。さすがに思わなかった俺だった。

二限目。今回は織斑先生の授業だ。

さあ集中してなきゃ鉄拳制裁だからさっきよりも集中してなくては

「ああ、そういえば、クラス代表を決めなくてはいけくないな」

クラス代表。なんでも近々クラス対抗戦があるらしく、それに出るやつを決めなくてはいけくないらしい。

まあ簡単に言えば委員長だな。まあめんどくさいから立候補する気はないけど。

でも、さっき織斑先生が他薦、自薦問わないって言ったからなあ。

やな予感するなあ。

「はいっ、桐谷くんを推薦します！」

やっぱりきたーーーーー！

「私も桐谷くんを推薦します」

「わたしも！」

「ウチも！」

うわぁ、担ぎ上げる気満々だぁ。

誰か立候補してくれないかなあって思ってたら。

「待つてください！納得できませんわ！」

来ましたよ。ていうか忘れてたわ、オルコットの存在。
そこから先は男に対する批判と日本に対する暴言の嵐。
……こいつ代表候補生って意味を理解してないのか？

『（言い返さないの？）』

『（ん、どうしようかなぁ。）

言い返したらめんどいことになりそうだしね。って、ん？』

「……………。なんせわたくしは唯一教官を倒したのですから！」

「それなら俺も倒したけどなw」

「なっ！」

むしろあれは倒せないほうがおかしい気がする。

だってただ突っ込んできてそれを避けると同時に少し後ろから押し
たら

壁に激突してそのままリタイアって（笑）。

……って、あ。

「……わたくしだけとききましたか？」

はいフィッシュ！もうどうにでもなりやがれ（自棄になった）！

「あれだ、女子ではっていうオチだ（爆笑）」

「あなたも教官を倒したっていうんですの？」

「さつきからそういつてるんだが？」

まあお前にも負ける気はしないけどな。

お前からは全く脅威を感じないし。

お前よりもむしろ篠ノ之のほうが脅威を感じるし。

あいつが専用機を持ってなおかつ

おまえと同じ時間訓練すればきつといい操縦者になるぜ」

突然話題にあげられた筈はなんか顔を赤くしてこっちをおろおろと
みてるんだが。

……かわええ。

「っっ、決闘ですわ！」

「まあいいぜ。その歪んだ誇りをぶっ壊してやるよ、セシリア・オルコット」

「話は決まったな。では一週間後の放課後、第三アリーナで行う。
それまで各自、準備をするように。では授業を再開する」

この話はこれで終わりといわんばかりに織斑先生が授業を再開した。
ふっふっふ、オルコットよ。俺をその気にさせたことを後悔するが

いい。

『（本気でやるの？）』

『（ああ、本気で遊んでやる。

そうした状態で叩きのめせばあいつのプライドはボロボロだろう
？）』

『（……………やっぱり和人ってドSだよな）』

失礼な。俺は敵に対しては容赦しないだけだ。

は？代表候補生？なにそれ、強えの？（後書き）

作者：これからは普通のあとがきじゃつまらんと思うのでちょっと変えてみます。では主人公君に登場してもらいましょう。

桐谷くん。

桐谷：はいはい。いったい何の用だよ。俺は勉強せないかんのだが。

作者：お前な。少しはまじめに取り組んでくれ。でないとお前の周りで修羅場が發生するぞ？

桐谷：ほーっう？（真剣を素振りしてる）

作者：……………すみませんしたー！！（土下座）

桐谷：わかればいい。んで？俺は次回の予告でもすればいいのか？

作者：その通りデス。こう面白くお願いします。

桐谷：はいよ。

初日から波乱に巻き込まれた俺。

しかし波乱はこんなもんじゃ済まない。

それは放課後明らかに！

次回、『ルームメイト？へ？俺1人じゃねえの？』だ。
よろしく頼むぜ！！

ルームメイト？へ？俺１人じゃねえの？（前書き）

第7話です。

桐谷くんは原作一夏くんのようなことはおこしません。
期待してた人は申し訳ないです。

ルームメイト？へ？俺１人じゃねえの？

そんでいろいろあつて放課後。

俺は教室で復習をしていた。その時、

「あ、まだいましたね。よかったです」

「へ？山田先生？どうかしましたか？」

入ってきたのは山田先生。どうしたべ？

「あのですね。寮の部屋が決まりました」

「あれ？俺の入学って予定外だったからしばらく調整に時間がかかると聞いていたんですけど？」

「それがですね、何とか調整したんです。その辺政府から聞いてません？」

政府のあたりから先生は声を潜め俺にしか聞こえないようにした。なるほど、俺というケースが万が一さらわれたりしないようにか。

「わかりました。ただ荷物に関してはどうするんです？」

「ああ、それなら……」

「私がおまえの実家のほうに掛け合っておいた。もう届いているだろっ」

織斑先生の登場。 まあ荷物はほとんどまとめてたから問題ないか。

「了解しました。 んじゃこのまま寮に向かえばいいんですね？」

「はい。 あ、これがカギです。」

シャワーは部屋についてますのでそれを使ってください。

一応大浴場はあるんですが桐谷君は使えません」

「当然でしょうね」

女子と一緒に風呂とか。 無理無理。 俺の理性とかが無理。
…そういえば聞いてないことが一つ。

「……………ちなみに一人部屋ですよね？」

「そう都合よくなるわけがないだろう。 相部屋だ」

まじかあああああ！

「ついでに質問です。 その相部屋になった奴って誰です？」

「篠ノ之だ。 まだいいだろう？」

あー、箒か。 …………… あいつなら俺を襲ってくることもないだろうな。
うん、平気平気。

「まあそうですね。 それじゃ今から向かいます。 織斑先生、山田先生、また明日に」

「ああ」

「はい、桐谷君もまた明日」

二人の先生に挨拶して俺は寮に向かった。

「ここか」

俺は自分の部屋になる一〇二五号室の前にいた。

……万が一幕が着替えたりしてたらやばいので気持ち強めにノックする。

……反応なし。

「ま、はいつてみるか」

俺はノブを回して部屋に入った。

「おー、すげー。高級ホテルも真っ青じゃん」

少なくとも今までで一番いい部屋だ。

ついでにシャワー室らしき部屋から人の気配。

……こいつはまずい。ラッキースケベの称号を得てしまつかもしれん。俺は急いで部屋の外に出た。

「ん？誰かいたのか？」

「おい、箒。俺だ。和人だ。とりあえずなんか着ろ。服着たら呼んでくれ」

「か、和人！／＼／＼なんでこの部屋に？」

「あー、説明するから早く部屋に入れてくれ」

「あ、ああ／＼／＼」

それからほんの少しして。

「い、いいぞ」

「おう。すまん」

俺は部屋に入ったのだった。箒はなぜか胴着を着ていた。

…あ、すぐに着れるのがそれだったのね。

「で、せ、説明してほしいのだが」

「おう。実はな……」

俺は先ほど聞いた話を箒にそのまま話した。

最初こそ箒はいろいろ言ってきたが上からの決定ということで納得したらしかった。

「なんというか、おまえも大変だな和人」

「ああ。まあお前でよかったよ」

「なっ／＼／＼なぜだ？」

「いや、他の女子だったら（性的な意味で）襲われそうだったし」

「ああ、なるほど」

篤はおそらくSHRのことを思い出したんだろう、うんうんとうなずいている。

「わかってくれて何よりだ。」

んじゃ、そんな長い時間じゃないだろうが、よろしく頼む」

「う、うむ」

それから二人でいろいろとルールを決めたりしてから寝た。

ルームメイト？へ？俺1人じゃねえの？（後書き）

作者：はい、やってまいりました後書きタイム。

今回はレスティアさんに登場願います。

レスティア：はい♪みんなよろしく♪

作者：……元気だねえ。作者なんて寒さで

ガクガクブルブルしてるってのに。

レスティア：だってあたしは寒さなんて感じないもん。

作者：……そうだったな。

んじゃ、今回の話について少し感想などひとつ。

レスティア：ん〜、今回の展開はある程度分かった人も多いと思いますーす。

もっと面白味があってもよかったんじゃない？

作者：ぐっ、だがしかし。作者にはこれが一番いいと思ったんだ。

ラッキースケベもいいけど、

桐谷くんはそんなキャラじゃないだろ？

レスティア：確かに。

作者：つーわけで次回予告頼むわ。

レスティア：りょーかい♪

明かされるプライベート

盛り上がるクラス

しかしそんなの望まない当人

和人がとる選択は？

次回、『決闘前の小休止』です。

見てくれるとうれしいな♪

決闘前の小休止（前書き）

第8話。

………まだ投稿してから1週間たつてないはずなのに
早くも総合PV10,000突破しました!!!!!!
うれしいです!!!!!!

あと感想も増えてました。ありがとうございます！

ちなみに感想にはしっかり返信をしようと思ってますので、
感想なりなんなりある人は書いてくれるとうれしいです。

今後の展開の参考にするかもしれないので。

では、『決闘前の小休止』どうぞ。

決闘前の小休止

IS学園二日目。

俺はいつものように朝早く起きてランニング二〇キロしたあと、真剣で素振りを五千回。

その後腕立て、スクワットをそれぞれ二〇〇回三セットして部屋に戻った（こらそこ、人外だなんて言わないの）。

そしてシャワーを浴びて、着替えたところで筈が起きたので筈とともに朝食。

ちなみにこの時に織斑先生が一年寮の寮長だと知った。

そして授業中にちょっとしたことが起きたのだ。

「あの、先生。篠ノ之さんってもしかして篠ノ之東博士の関係者なんでしょうか？」

ISのコアについての話をきいて一人の生徒が質問したのだ。

「ああ、篠ノ之は東の妹だ」

……織斑先生、プライバシーってわかります？

案の定、クラスメイト達は筈に質問を投げかける。

あ、そろそろあいつ限界だ。

「あの人は「おい、ガールズ」…和人？」

「お前らさ、身内が天才だからってそいつが全てを知ってるわけないだろうが。」

それに天才の身内っていう目で見るのは個人に対する冒瀆だぞ」

ちよつときつめに言ってるやるとみんな俺の言わんとすることが分かつたらしく

箒に少し誤って席に戻っていった。

その様子を織斑先生は感心したように見てて

箒はなんか顔を赤くしてこっちを見てるんだが。はて？

『（……鈍感だね……）』

『（あ？）』

『（なんでもないよ）』

？？どうしたんだ、レスティアのやつ。

まあそんなこんなで授業が終わり昼休み。
俺は箒のほうへ歩いた。

「よう、箒。飯食いにいかね？」

「わ、私とか？」

「おう、おまえとはいろいろ話が合いそうだな。
ついでに交流を広めるためにほかのやつも誘うか？」

「あ、ああ。構わん」

「そつか。おーい、一緒に飯食わねー？」

「うん、行く行くー」

「わーい、たにちーとご飯ー」

「わたしお弁当だけどいいよね？」

うんうん、いい傾向だ。

っていうかたにちーって。……まあいいか。

そして俺たちは食堂に向かう。

これは余談だが、歩く俺たちの後ろをハーメルンの笛吹きのごとく女子がついてくるんだが。なんか怖い。

そんでもってつきました食堂。

IS学園の食堂は様々な国籍の人々がいるためかメニューが豊富だ。まあ俺が選ぶのは基本和食か中華だが（腹にたまるので）。

「さて、いただきます」

「なあ和人、ほんとにそんなに食べるのか？」

箸がなんかありえないものを見るように俺の前を見る。そこには、

麻婆丼（超大盛り）

生姜焼き（肉、キャベツ共に大盛り）

味噌汁（どんぶり一杯）

ざるそば（二人前くらい）

緑茶（二リットルペットボトル）

が並んでいる。

……… ほんとはまだ食えるけど自重してみました。

『（いや、これは自重してるとは言えないよ）』

レスティアよ。それは言わないのがお約束だ。

「いや、これでも自重してるんだぜ？俺って燃費が異常に悪いからな。」

こんくらい食わないともたないんだ」

「そ、そうか……」

「つつか、箒はいいとして、他のメンツ。そんだけで大丈夫なのか？」

箒は普通に定食を食べているが他の三人は一品くらい。

「わ、私たちは平気だよ。お菓子とか食べてるし……」

それ、一番太るパターンだけど俺はデリカシーがあるから何も言わない。

「ふーん、ま、いいか。人それぞれだ」

「ねえ、あなたが噂の一年生？」

「んあ？噂？もしかして決闘のことってもうそんなに広がってんですか？」

話しかけてきたのは二年生らしき先輩。

「ええ。それにしても代表候補生にケン力売るなんて。大丈夫なの？」

「ケン力を売ったんじゃないかって買ったんですけどね。あと大丈夫ですよ」

「ほんとにー？なんだったたら私がIS操縦についてコーチしてあげるけど」

……この人も少しなめてるな。まあいい。

「気持ちはずれいいんですけどねえ、必要ないですよ。あんな天狗は今の俺で十分だ」

「ふーん、それじゃあ間違いなく勝てるってこと？」

「もち。なんだったら楽しみにしてくださいよ。あの人を見下して正当な評価をできない愚か者が叩きのめされるのをね」

その時の俺は箒たちやレスティア曰く
獲物を見つけて嗤った死神のように見えたそうな。
先輩も軽く引いてるし。

「じ、じゃあ楽しみにしとくわね」

「あいあいー」

俺は手をひらひらと振って食事に戻る。

「……あまり何度も言いたくはないのだがほんとに大丈夫か？」

「筈までかよ。大丈夫大丈夫。なんなら放課後ちよつと剣で勝負でもするか？」

「い、いいのか？たしかにおまえの実力を知っておきたいとは思っていたのだが」

「俺も退屈だしな。どうせ部屋に戻ったって復習予習しかないんだ。多少なら問題ない」

「うむ。それでは放課後私とともに来い。剣道場に連れて行ってやる」

こうして今日の俺の放課後は予定が決まったわけであった。

決闘前の小休止（後書き）

作者：どうも、葛縞です。今回登場願うのは篠ノ之箒…と見せかけてまさかの織斑千冬先生にしてみましょう。せんせー、お願いします。

千冬：ふむ、よろしく頼むぞ。

作者：……相変わらずお堅いですね。ここはあえて作者権限で思いつきはっちゃけた千冬さんを…

がすん！！！

作者：……（頭から煙出して気絶中）

千冬：するな、馬鹿者。それと織斑先生だ。

作者：だろうと容赦はしないぞ？（出席簿から煙出てる）

作者：……（引き続き気絶中）

千冬：…む？気絶してるか。

いかなな、桐谷の基準でたたいてしまったようだ。

桐谷：（勝手に登場）織斑先生、とりあえず次回予告でもしてみればいいんじゃないですか？

千冬：確かにそうだな。では。

放課後の剣道場

そこで相対するは侍少女と人の姿をした刃

閃く竹刀はすべてを打ち砕く

次回、『俺の実力？知らないほうがいいぜ？』だ。

諸君、見なければグラウンド50週だ！

俺の実力？知らないほうがいいぜ？（前書き）

第9話です。

……いや、自分でもどうかと思うくらい桐谷くんを強化しすぎましたね。これから先負けることってあるのでしょうか……。仮に負けさせるにしてもどうやって負けさせよう……。

俺の実力？知らないほうがいいぜ？

放課後。俺は防具をつけて箒と向き合っていた。

箒は正当な剣道の構え。

俺は異端な無形の位。っていうか防具邪魔。

「部長さん。先に謝つときますね。竹刀とか壊すかもしれないんで」

「いやいや、いいよ。謎の一年生の実力を測れるんだ、安いものだよ」

なかなか太っ腹だな。

「篠ノ之さんも準備いい？」

「はい。いつでも」

「それじゃ……………開始っ！」

その瞬間箒は俺に向かって面をたたきこもうとした。

いやはや、俺の目に狂いはなかった。こいつはすごい。

踏込のタイミング、竹刀を振る速度、気迫ともに全くいいものだ。

まあ俺には届かないが。

俺はわずかに後ろに下がり回避した。

そしてその瞬間箒の小手めがけて竹刀をはね上げた。

篠ノ之箒SIDE

「開始っ！」

合図とともに私は今までで一番と思える踏込で和人に打ち込んだ。だがこれで終わることはないだろう。おそらく私の竹刀を防ぐはずだ。避けるというのは難しいだろうと思っていた。だが、

「（なっ！一寸の見切りだと！）」

そう、和人はほんのわずか後ろに下がって紙一重で私の面をかわした。さらにそのまま和人は下げていた竹刀をすさまじい速さではね上げてきた。

狙いはおそらく小手。

「（くっ、速すぎる！）」

私はそれを何とか下がって避けたが、竹刀に当たって腕が跳ね上がってしまった。

そんな明らかな隙を和人が見逃すはずがなく、はね上げた竹刀を水平に持ってきて私を超える速さの踏込で一気に…。

「胴！」

振りぬいた。

その瞬間、私は一瞬意識が飛んだ。

桐谷和人SIDE

「胴！」

俺は思いつきり箒のから空きの胴に竹刀をたたきこんで…あ。

「やべっ」

とつぶやいた時にはもう遅い。

箒は吹っ飛んで道場の壁にぶつかってしまった。

「お、おい、大丈夫か？」

「……っぐ、げほっ、けほっ」

ほっ、そこまでひどくはないらしい。

「う…、か、和人？」

俺はするすると箒の防具を解いていく。

そんで全部解いたらそのまま箒を抱え上げた。

「なっ／＼／何をする！」

「いや、一応保健室にな。結構本気で打ち込んだし、

万が一ってことがあり得るからな。

んじゃ、部長さん、すいませんが片づけお願いできますか？」

ちなみに俺の前言通り俺が振るった竹刀はぱつきり折れている。
ついでに箒の胴は割れかけている。

「え、あ、うん。いいよ」

呆然としていた部長さん。そりゃそうだろうな。

人が飛ぶって初めて見る光景だろうし。

ほかの部員もぽかんとしてるし。

「そんじゃ、行くぞ箒」

「う、うむ／＼／＼（お姫様抱っこお姫様抱っこ……）」

むう、箒のやつ顔が赤いな。熱でも出たか？

『（……鈍感）』

『（ん？なんだって？）』

『（なんでもないよー（呆））』

？とりあえず俺は箒を保健室へ運び一応診てもらった。
結果、打撲のようになっていたそうな。

うん、やっぱり俺の本気は危険だわ。

「和人はすさまじく強いのだな」

場所は変わって寮の自室。

俺がISの参考書を読んでいると箒が話しかけてきた。

「まあな。五歳くらいから常人じゃ死ぬような修行積まされたからな。

あんなことになっちまった。まったく、うちの爺どもは鬼過ぎるぜ」

いやはや、今思い返せばよく生きてたな俺。

「ふむ、例えばどのような鍛練を？」

聞いちゃうかい？よりによってそれを聞いちゃうかい？

「話してもいいけど、後悔するなよ？」

「？」

そして俺は自分がさせられていた鍛練の内容を話し始めた。

例えば体力強化のために両手両足に重さ一〇キロの重りをつけられてなおかつトラックのタイヤを引っ張って毎日二〇キロ走ったりとか。動体視力を養うために滝の前に座らされて二週間ずっと滝を見続けてたりとか。

剣術修行で木刀でもって布を切らされたりとか。まあこんなの軽いほうの一例にすぎないのだが。

ほら、話していくとどんどん箒の顔色が青くなってく。

「……もういい。というよりよく生きていたな？」

「俺もそう思う。こんだけ異常な鍛練積んでんだ。IS戦闘なんかそれに比べればちよろいちよろい」

「（確かにそんな修行をしていればちよつとやそつとじゃ脅威など感じないだろうな……）」

「ちなみに箒よ。お前シャワーどうする？」

「あ、ああ。使わせてもらう」

「ほいよー。ごゆっくり」

箒は着替えやらを持ってシャワー室へ向かった。んで、俺は一人になったわけだが。

「（ねえ、今ならいい？）」

「（ん、いいぞ。悪いな、最近まともに相手してやれなくて）」

レスティアと雑談タイムだ！

「（別にいいよ。しょうがないし。」

まだあたしが覚醒してるなんて知られるわけにはいかないでしょ？）」

「（ああ。さすがに騒ぎになりすぎるだろ。」

第二形態移行してるんならまだ説明がつくけど第一形態で

コア人格覚醒っていうのは前代未聞すぎる。
第二形態移行してからなら別にいいんだけどな」

「まあ聡い人なら気づいてるかもしれないけど。例えば織斑先生とか」

「あの人か……」

確かにレスティアの言うとおり、あの人なら俺の戦い方でわかるかもしれない。
まあばれたらばれた時だし。

「ま、ばれたらその時さ。お前が取り上げられるってことにはならないだろう。

ていうかそれが不可能だからあの時からずっと俺が装着してるんだし」

そう、あの日、俺が初めてISを装着し襲撃者を退けた後。
俺がつけているISを開発していた企業の人が
一旦ISを回収させてほしいというので回収させたのだが。
なぜかある程度俺から離れるとISが粒子変換して
俺の手元に戻ってきてしまったのだ。

まあ真相は俺から離れたがらなかったレスティアがだだをこねただけなのだが。

「さて、そろそろ第3巻も出るだろうし、雑談も終わりだ。決闘の時は頼むぜ、相棒」

「（任せて！和人に完璧な勝利をあげるよ）」

ほんと、頼もしい相棒だよ。

俺の実力？知らないほうがいいぜ？（後書き）

作者：後書きです。今回は篠ノ之箒さんに登場願います。

篠ノ之：こ、ここはどこなんだ？私は寝てたはずなんだが…。

作者：まあまあ、細かいことは置いておけ。

とりあえずなんか言いたいこととかないか？

篠ノ之：う、うむ。まあそうだな。なぜ和人をあそこまで強くしたのだ？

作者：いやー、原作だと一夏くんって強さ微妙じゃん？

だから思い切ってめちやくちや強くしてみようと思ったわけですよ。

それに基本作者は最強主人公設定が好きなので。

篠ノ之：そうか。

作者：あ、それと読者の皆さん。

お気に入り登録件数が40超えてて作者はうれしい限りです。

少なくとも銀の福音までは更新が滞ることはないと思いますので

これからも読んでくれるとうれしいです。

篠ノ之：ちゃっかり読者の皆様に感謝の意を表すのだな。

まあ礼儀だとは思うが。

作者・当然だ。礼儀は正しくてなんぼだろう。
では次回予告お願いな。

篠ノ之・わかった。

ついに迎えた決闘当日

姿を現すは異端なIS

それは蒼き雫を打ち砕くべく動く

そして自覚する想い

次回、『これは決闘ですか？いいえ、ただの蹂躞です』だ。
楽しみにしてくれ。

これは決闘ですか？いいえ、ただの蹂躪です（前書き）

どうも、葛縞です。

いよいよ戦闘です。と言っても戦闘描写に自信がありません（泣）
ですのでちょっとぐだぐだになってるかもしれませんが、
そのところご了承ください。

なにかアドバイスがあれば一言なりで書いてくれるとうれしいです。

これは決闘ですか？いいえ、ただの蹂躪です

なんだかんだで俺は今アリーナのピットにいる。

そう、これからセシリア・オルコットと決闘なのだ。

ん？一週間の描写がない？別にいいだろ。

普通に過ごしてたまに箒と手合せしてただけだし。

ん？ISの練習はつて？

んなもんいるか。楽勝だ、楽勝。

「結局お前はISの訓練はしなかったのだな……」

「だーからー、必要ないって。」

訓練なんかしたらそれこそオルコットの惨敗が決まっちまうぞ。

俺はエンターテイメントを大事にするんだよ」

「……………むしろ訓練を全くしていないやつに完敗するほうが
プライドにかかわると思うが」

失礼な。

俺がそんなことに行きつかないとしても？だからこそ、それがいいんだよ、箒」

「お前は本当に容赦がないな」

「あれ？なんで俺が考えたことわかるんだ？」

『（「途中から声に出ていたぞ（よ）。」「（」

レスティアにもツッコまれてしまった。
うん、これから気を付けよう。

「桐谷、そろそろ時間だ。ISを展開しろ」

「桐谷君、頑張ってくださいね」

織斑先生は相変わらずクールビューティー、山田先生は相変わらず癒し系だ。

うん、和む。

「了解。出るぞ、『暁と黄昏 サンライズ・トワイライト』」

『（OK！）』

レスティアの声が俺の頭の中でのみ響き

それと同時に俺は紅と蒼の二色に彩られた全身装甲のISを纏っていた。

俺の目の前に俺だけにしか見えない文字の羅列が映る。

シールドエネルギーチェック……OK

シンクロチェック……OK

フォームチェンジシステム《ラグナロク》チェックスタート

フォームゼウス……OK

フォームセラフィム……OK

フォームオーディン……OK

フォームチェンジシステムチェックオールクリア

スラスターチェック……OK

・

・
・
・

チェックオールクリア

サンライズ・トワイライト スタンバイOK

「よし。いける」

「こ、これが和人の…」

「ああ、これが俺の相棒だ」

箒が驚いている。

まあ全身装甲だしな。びつくりするよね。

「時間が推している。早く出る」

「そう急かさないでくださいよ」

ピットが開く。そして俺は足をカタパルトに接続する。
そして出撃前に一言。

「桐谷和人、サンライズ・トワイライト、出撃する！」

俺は一気に飛んだ。

アリーナへと出た俺を迎えたのは
全身青のISを纏ったセシリア・オルコットだった。
オルコットは俺の姿を見るなりわずかに驚いたようだが

すぐにまた見下したような顔をした。

「（全身装甲？しょせん防御タイプのISですか。
わたくしの敵ではありませんわね）」

なーんて考えてんだろうなあ。

そもそも全身装甲が防御タイプって考えは古いだろうに。

「ふん、遅かったですわね」

「いやあ、ちよつとおもしろおかしくお話しててな」

「遅れるなんて紳士の行いではなくってよ。

……まあいいです。最後のチャンスをあげますわ」

ほ？チャンスとな？

……よし、いいだろう。遊んでやるつもりだったがやめだ。

全力全開超本気でなぶってやる。

「ちなみにだがオルコット、もう開始の合図はなってるよな？」

「？ええ、なってますが…、どうかなさいましたの？」

「いやいや、別に。だったらもう始めてもいいってことだよな」

『（スラスター、スタンバイOK）』

「は？」

察しが悪いね。

「つまり、俺の先制攻撃ってやつだ！」

言葉が終わるか終わらないかで俺は瞬時加速を発動。

オルコットの目前に瞬時に接近。

近接ブレード『デュランダル』を瞬時展開し切り付けた。

篠ノ之第SIDE

「つまり、俺の先制攻撃ってやつだ！」

始まりはいきなりだった。

和人は二回目（……………）だったはずだ。うん）の

IS起動とは思えないことをやってのけたのだ。

《瞬時加速》、それは代表候補生クラスであればできるのはおかしくはない。

だがそれを全くの素人がやるのでは話が違ふ。

瞬時加速とはセンスがあるものでもある程度訓練をしなければあれほど鮮やかに、

滑らかに発動できないはずだ。

それを和人は！

私は戦慄を覚えていたが、瞬時加速の直後の光景にも目を奪われた。腕を振りかぶった瞬間、その手には近接ブレードを展開、そのまま切り付けた。

その後はいったん離れてオルコットの狙撃をかわしていく。

一弾として被弾しない。

オルコットがビット兵器を使い始めたが、それすら当たらない。ひらひらと木の葉が舞うかのごとく、全方位から襲い掛かるレーザーをかわしていく。

私は自分の口が開きっぱなしになっていることに気づいてはいたが、閉じることができなかった。

ちなみに私の近くには千冬さんと山田先生がいるが、二人とも（特に千冬さんのあんな顔は初めて見たな…）驚いて口が開いたままになっていた。

「……………あの、織斑先生……………」

「……………なにかな、山田先生……………」

「……………彼って本当にIS起動したの今回で二回目なんですか？」

「……………ああ、そのはずだ。」

企業からは何度も頼んでいたらしいがあいつはすべて断っていたらしいからな。

「……………篠ノ之、あいつは訓練などしてないと聞いたがほんとうか？」

あ、こっちに質問が来た。

「はい、和人は訓練なんて必要ない、むしろしないほうがいいハンデになるというて

一度もアリーナにすら足を運んでいません。

この一週間はずっと勉強してるか私と剣の稽古をしているかでしたから」

自分で言ってるてありえないと思う。

というより仮に一週間訓練に費やしたとしてもこれはあり得ない。確かにセンスがよくて、訓練をしていればいい戦いはできるだろう。

だが今日の前で起こっていることはセンスの一言ではあり得ない領域だ。

「いったいどうなってる？」

この動きはそんじょそこらの代表候補を超えるどころか国家代表にすら届くぞ？」

千冬さんがぶつぶつぶやいているが私には届かない。私は驚きつつも和人の動きに魅了されてしまっている。

その動きはまさに演舞。

レーザーを風として和人を木の葉に見立てればそれで成り立ってしまっただろう。

レーザーを横に動いて避けるのではなく体を回転させてレーザーと自分の位置を入れ替えてしまう。

……いったい和人の戦闘センスはどれほどなのだろうか…。

そして私は見てしまった。和人の目を。

その目は、親に与えられたおもちゃを前にした子供のような純粋な楽しさに染まっていた。

その純粋な目を見た瞬間、私の中で揺らいでいたある想いが固まった。

そうか、これが……

『恋』というやつか。

これは決闘ですか？いいえ、ただの蹂躪です（後書き）

作者………今回は戦闘中ってこともあって誰も出てくれませんねえ。

どうしようか？

一夏……よう。

作者………！！！！！！！！
なんでいんの？

一夏……さあ？俺もわかんねえ。
でも誰もこれないなら別にいいんじゃないか？

作者………まあいいか。んで、今回の感想としてはどうよ？

一夏………（原作との）俺との扱いが違いすぎるぞ、これ。

作者……仕方があるまい。
二次創作とはそういうものだ。
そして俺は意図的に変えたからな。

一夏………そうなのか……（すこし落ち込む）。にしても強いな、桐谷は。

作者……作者渾身の超人ですから。
では次回の紹介これで頼むわ。

一夏……（作者から紙を受け取って）おう。なになに

紅と蒼の機体が舞い踊る

BGMは英国貴族の喚く声

新たにする和人の意志

そして力の一端を見せる蒼紅の機体

次回、『決闘（という名の蹂躪）の終幕』

よろしくたのむぜ！

決闘（という名の蹂躪）の終幕（前書き）

決闘終わりです。

いや、これを決闘と呼んでいいのか微妙（笑）

一方的すぎる。

ちなみに今日は時間を空けてからもう1話更新したいと思います。
では引き続き桐谷くん無双です。

決闘（という名の蹂躪）の終幕

桐谷和人 SIDE

？なんか妙に熱っぽい視線を感じる気がするが…。
それもピットのほうから。誰だ？

『（鈍感だね（笑））』

『（ん？なんだって？）』

『（なーんでもーないー）』

『（そうかよ…、ってこのやり取りいい加減デジャヴるわ！）』

そんな漫談をしながらも俺の体は動く。

ビットからの全方位射撃、それでもって時々オルコット本人からの狙撃。

すべてを回避する。

……………うん、爺もとの鍛練に比べりやまだまだいけるな

（爺どもの時は、鋼糸の足場に立たされて

上下左右全方位から矢が連続で射掛けられた。しかも矢じりありで。まじ死ぬる）。

「くっ、なんで当たりませんの！」

「いやいや、あんたの狙撃がへばすぎるんだよ（笑）」

「なんですつてえええ！」

オルコットは俺のあざけりに対して大変取り乱し、ひたすら乱射を繰り返す。

ははは、計画通り（にやり）。

このままエネルギー切れしてくれんかね？
そしたら俺のフィーバータイムなんだが。

『（ドS……）』

違うなレスティア。これは戦略というものだ（キリッ！）。
戦闘において相手の弾切れを狙うのは卑怯でもなんでもない。

むしろ俺みたいな普通に撃つても当たらない奴には
普通に撃つのは無駄以外の何物でもない。
相手をわざと接近させてカウンターを狙うのがセオリーだ。

『（そんなことができるのは和人だけだよ……。普通は近づかれたら負けだよ……）』

おや？レスティアがなんか鬱入ってる？
おいおい、大丈夫かよ相棒。

『（うん、もうツツコまないことにする）』

そうしろ。精神的衛生のために。

………あり？さっきから射撃がやんでるぞ？

「どうしたんだよオルコット。まだ俺は墜ちてないぞ？
そ・れ・と・も」エネルギー切れかにやあ？」

俺はにゃーんと猫のポーズをとつてみる。

……………うん、自分のポーズを想像したつけ吐き気した。

これからは自重しよう。

「……………うかつでしたわ。わたくしを怒らせて無駄な射撃をさせるとは……」

おりよ？気づいた。まあ今更だけど」

「今更かよ（笑）。普通はもつと前に気付くだろ。

つ・ま・り、おまえは簡単に相手にペースをつかまれる

うかつ極まりないやつだってことだ。

いやー、お前のおかげで希望持てたぜ。

お前程度のやつで代表候補ってことはほかのやつらも大体似たり寄つたりだろ？」

「…………（頬をひきつらせている）。それがどうかしましたの？」

「いや、俺の目標が達成しやすくなるなってな」

「あなたの目標ですか？いったいなんだっていうんですの？」

ふっ、ついに言う時が来た！

「俺の目標はただ一つ。世界最強、世界最高の操縦者になることだ

ない。

瞬時加速で下にいる。

さてと、ちよっくら使いますかね。

『（レスティア、フォームチェンジ。ゼウスよりオーデイン）』

『（了解。システム起動。フォームゼウスよりフォームオーデイン、セットアップ）』

レスティアの声と同時に俺の前に文字が現れる。

フォームチェンジシステム《ラグナロク》 起動
フォームゼウス↓フォームオーデイン
チェンジスタート

文字が消えると同時、俺は蒼い粒子に包まれる。

そして次の瞬間には俺のISはその姿を変えていた。

比較的スマートだったボディは先ほどよりごつくなり、

ウィングスラスタもまた肥大化してより翼に近い形になっていた。

何より違うのはその色。

先ほどとは違い、今の俺のISは蒼一色だった。

これこそがサンライズ・トワイライトの特殊システム、『フォームチェンジシステム』、

システム名、『ラグナロク』だ。

チェンジが完了すると同時、

俺はオーデインの主武装である二丁一対バスターライフル『カラドボルグ』を展開、

二丁を一つにジョイントしバーストモードを発動

。（イメージ的にはウィングガンダムゼロのツインバスターライフル）。

同時に照準をオルコットに合わせた。

ここですよやくオルコットは俺が下にいることに気付いたらしい。たぶん目の前がロックオン警告でやばいことになったんだろ。

「な、なんでISの姿が変わってるんですの?!」

わるいねえ、それがこいつの仕様なんだわ。そんじやはい終わり。

「カラドボルグ、照射!」

引き金を引く。

その瞬間、隣り合った二つの銃口から深蒼の螺旋が吹き出し、オルコットを飲み込んだ。

そして俺の勝利を告げるアナウンスが響いた……。

決闘（という名の蹂躪）の終幕（後書き）

作者：はいお疲れ様。

桐谷：いや、全然疲れてないから。むしろ準備運動だったから。

作者：やっぱりお前って規格外だな。

桐谷：そうしたのはあんただろう？俺のせいにするな。

作者：違うないねえ。

でもそういうチートなところがおもしろいって評価を頂いてるんだよね。

桐谷：まあ俺も弱い自分なんて想像もつかないからいいけどな。

作者：ははは。んじゃま、少々短い後書きだったけど次回予告頼むわ。

桐谷：あいあいつと。

圧倒的強さの蒼紅の機体

しかし現れるは地獄の審判員

下される判決

そして明かされる衝撃

次回、『勝ったぜー。え？ちょ？待つて』だ。

……俺が生きてることを祈っててくれ…。

勝ったぜー。え？ちょ？待って（前書き）

本日2回目の更新です。

基本作者は気まぐれですので、一応毎日1話と決めてますが
そうならないこともあり得ます。
では。

勝ったぜー。え？ちょ？待つて

やあ、さつきオルコットを惨敗させた桐谷和人だ。
そして今は裁判官の前の犯罪者みたいに萎縮してる。

いや、意気揚々とピットに戻ったら般若がいたんだよ？
そんで逃げる間もなくなつかまって

そのまま俺は正座させられてめちやくちや睨まれてる、織斑先生に。

まあ睨まれもするかな。

だって俺が学園側に提出したデータはゼウスの時のやつだけで
さらに《ラグナロク》については全く記載してなかったしね。

……調子に乗って《ラグナロク》使わなれりゃよかった（泣）。

「それで？桐谷、何か申し開きはあるか？」

「……いや、ほんとにすみません。」

ほんととは提出したデータで終わらす予定だったんですが、

俺の中の何かが天元突破↓俺暴走↓やっちゃった、

だったんで……いたたたた！アイアンクローは勘弁してください！

マジで死にます！」

もうギリギリじゃなくてこう、

メシメシッ、グギギギッ、ベキベキベキッて音になってますから。

俺の頭蓋骨の耐久値は一瞬でもはやレッドゾーンです。

「……まあいい。お前のISの全てを説明しろ。」

それで勘弁してやる。ちなみに何かを隠すことは許さん。隠したら……」

……怖いっす。緩みかけた指にまた力を込めてきた。

この状況で隠し事ができるやつがいたらそいつは最強だといってやるう。

「は、はいいい！えつとですね……」

俺はフォームチェンジシステム《ラグナロク》について説明した。ついでにみんなにも説明しとこう。

……みんなって誰だ？まあいいか。気にしたら負けだ。

フォームチェンジシステム《ラグナロク》ははっきり言うと第三世代ではなく第四世代の技術だ。

つまり、俺のISは第一次形態移行の際に

第三世代機から第四世代機へと世代アップしたのだ

（ちなみに言うところのサンライズ・トワイライトを作ってた企業もレスティアのファイアウォールを超えられずシステムの存在を知らない）。

フォームチェンジシステムの恩恵で

俺は万能形態、近接格闘特化形態、遠距離射撃特化形態の

三つを使い分けることができる。

それぞれのフォームにゼウス、セラフィム、オーデインと名前がある。

以上、大まかな説明終わり（ちなみに織斑先生にはもう少ししっかりと説明しました）。

「なるほどな。それで最後はああなったのか」

「理解してくれて何よりです。」

これでサンライズ・トワイライトの説明は終わりで「ガシッ」

……………うそです。まだ終わってないです（汗）。

です。そのアイアンクローをやめてください、お願いします」

「下手に隠し事などしようとするからだ。

ちなみに今隠そうとしたことがおまえにあれほどの動きを許した要因なのだろう？」

……………やっぱりばれた——————！！！！

「（大丈夫かな？）」

「（大丈夫だろ。…多分。……………きっと。……………メイビー）」

あれ、どんどん自信がなくなってくよ？

「まあその通りなんですけどこれって

多分前代未聞なことですよ？それでも聞きますか？」

当然とばかりにうなずく教師二人と俺の友人一人。

「（レスティア、音声解放）」

「（はい。）えっとお、初めまして皆さん。

あたしはサンライズ・トワイライトのコア人格で名前はレスティアって言います。」

よろしくね♪」

「「「……………はあああああああ？！！！！！」」」

はい絶叫。まあそうなるよな。

「桐谷…、お前、コア人格を覚醒させていたのか？」

「ええ。ていうか最初にこいつに乗り込んだら勝手に目覚めましたか？」

「……………どうやらお前がISに乗っているのは必然のようだな……」

『そうですよー。』

初めて和人があたしに触れた時、もう、ビビッ！と来ましたから。その瞬間にあたしは和人にふさわしくありたいって思って頑張って機体を魔改造してみました♪」

……………いや、あれはもはや魔改造って領域じゃないだろう。

どこに、頑張って世界が開発に躍起になってるシステムを構築するコア人格がいるんだよ。

研究者が泣くぞ。それこそ血の涙を流して。

「……………和人、コア人格が目覚めていただけでああも変わるものなのか？」

篤が俺に質問してきた。

「そりや変わるだろ。」

なにせ自分と全く同じ思考の熟練のIS操縦者と二人で一つのISを

操縦してるようなもんだぜ？

ISの動かし方はレスティアが直接俺の脳に

ダイレクトに経験として叩き込んでくれるし、俺が把握できなかったときは

こいつが勝手に把握して回避してくれるからな。

俺一人だったらたぶんここまで完勝ではなかったと思うぞ」

『嘘ばかり。あたしがいなくても今と同じスペックなら完勝できるくせに』

「なんだよレスティア。もしかして自分はいらないんじゃないかって思ったのか？

もしそうならコア空間まで降りてって関節極めるぞ？

まあコア空間行けるわけじゃないけど」

『いや、だって……。和人って完璧なんだもん……。』

「それはお前がいるから余裕をもってられんだよ。言ってるだろ？ お前は俺の相棒だってよ。代わりなんていねえんだ。もっと自信持ちやがれ」

『／／／／／（やっぱり天然フラグメイカーだね）うん、わかった』

わかればよし。

おや篝、どうしたのだ？

なんか顔が少し怖いよ？え？俺のせい？あ、そうですか……。

「あー、こほん。桐谷、とりあえず学園側で詳しいスペックデータを
とらなければならぬからISを預けてほしいのだが？」

「んー、それができればひと月前にとくにやってるんですけどねえ」

『当たり前ー、あたしは和人から離れたくないもん。』

それにスペックデータをとるって言うておいてあたしを封印する
かもしれないじゃん。

そんなのやだもん。あたしはずっと和人と一緒に』

「っっていうわけです。こいつは俺から離れようとしないうで、
たとえどんな手段を用いようともこいつの意志で離れない限り
引きはがすのは無理ですよ。

なんせ遠隔コールまでできるくらいっすから」

「……………つくづく規格外なISだな。まあいい。

今度の休みにでもお前立会いの下で、でならどうだ？」

『それもいいですよー。』

それにあたしの詳細データとったところで再現とか無理だと思い
ますよ？

全部の技術をコアネットワークつながりで

東博士のメインコンピュータから引っ張り出しましたから』

「……………はあ、わかった。とりあえず今日のところは解散とする。
以上だ」

あ、やっと解放だ。やったー…。

勝ったぜー。え？ちょ？待つて（後書き）

作者：では恒例の後書きです。

ご登場願いましょう、レスティアさん。

レスティア：はい、呼ばれました。

作者：いやー、やっぱ織斑先生は怖いね。

自分でやったことなのに桐谷くんがかわいそうに…

ずとん！…！（上から何故か漬物石が！）

作者：…（たんこぶ作って気絶中）

レスティア：あらら、織斑先生を怖いなんて言うから。
でもこれ、ほんとにどうやったんだろ？

作者：…（例によって気絶中）

レスティア：ま、いつか。次回予告つと。

部屋で語られるさらなる力

侍少女はその恐ろしさに身を震わす

英国貴族は新たな想いを宿し

俺は新たな友を得る

次回、『決闘後の一幕』よ。

楽しみにしててね♪

あ、その前にIS設定が入るよ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2312ba/>

IS～紅と蒼を纏いし男～

2012年1月13日19時54分発行